



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	翻刻『万代大雑書古今大成』（九）
Author(s)	伊藤, 孝行; Ito, Takayuki
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 72, 1(右)-22
Issue Date	2019-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73278
Type	departmental bulletin paper
File Information	MC72-9_Ito.pdf



《翻刻》

翻刻『万代大雑書古今大成』（九）

伊藤孝行

《要旨》

本稿では、『万代大雑書古今大成』（読み…ばんだいおおざつしよこんたいせい）の書誌および翻刻の一部を掲げる。『万代大雑書古今大成』は天保年間に発行され、明治に入り改訂版が刊行された。内容は、生活するうえで必要なことが記してある便覧である。それゆえ、古くから伝わる習慣から占星術、名付けの際の留意点等々、多岐にわたる内容となっている。

『万代大雑書古今大成』は、管見のかぎり今のところ翻刻されていない。近代日本語資料の一として、また近代に於ける日本の習慣や風俗についての資料として、一定の価値はあろう。本稿では伊藤(2018)に続き、「う四」より「う十七」まで掲げる。

キーワード…近代語、翻刻、万代大雑書古今大成

《SUMMARY》

Modern Japanese, Reprinting, Bandai Ozassyo Kokon Taisei Reprinting: "Bandai Ozassyo Kokon Taisei" (9)

This paper presents a part of the book entitled "Bandai Ozassyo Kokon Taisei", which was first issued in the Tenpo Period (1837-1858), rewritten in present-day Japanese [characters]. It is a guide book describing the particulars of daily life at the time. It ranges widely over many themes, from traditional customs and astrology, to the points to note in naming children. Although "Bandai Ozassyo Kokon Taisei" is a printed book, and has had a revised edition issued in the Meiji period, it has not been translated into modern characters before, to the author's knowledge. As one of the sources of modern Japanese and also as a material describing Japanese manners and customs of the past, it is of indisputable value. An abstract from the book, together with the title, colophon and preface, are reproduced here. This paper reprints the Chapters U-4 - to U-17 in Ito (2018).

KEYWORD : Modern Japanese, Reprinting, Bandai Ozassyo Kokon Taisei

【凡例】

- ・ 漢字の表記は、通行の字体に改めた。
- ・ 割注は【 】で示した。割注中の改行箇所は／で示した。
- ・ ●は翻刻しかねた箇所である。今後の課題としたい。

う四 【生産年十二支吉凶／并守本尊の事】

【坎／中／連】ね

子のとしにうまるゝ人ハ一代の守本尊せんじゆくはんおん
なりこの人さきしやうにてハこく

ていの御子也ほくとのとんろう星

より白米一石二斗とぎんす

五貫目をうけて今じやう

へうまる此人ぜんしやうにて人のしだいにおこなはるゝを
たすけたるゆへにこんしやうにていしよくのゑんあり

つねにしづかなることをこのむうまれじやうなり

又ねのとしハそんなうとて人のにくミをうくること

ありつゝしミてよしふう婦のゑんハはじめの縁かハりて

のちにさだまるべし子ハ四人ありて二人の力を得べし

三十五よりまへハしんしやうさまたげありてくらう

おほしとしよるほどゆたかにしてゑいぐハあるべし

いのちハ七十三又ハ八十三にて死すべし▲ミやう

けんハじゆミやうをまもり給ふ▲みるくぼさつハ

ちゑをさづけ給ふ▲せいしぼさつハふくとくを

あたへ給ふ一代のうちよくしんぐしてよし

【艮／上／連】うし

丑のとしにうまるゝ人ハ一代の守ほんぞんこくうざう
ぼさつなり此人ハせんしやうハしやくていの御子なり

ほくとこのもんせいより

米一石五斗銀子六メ目を

うけてこんじやうへ生るゝ也

ちゑかしこくてべんぜつよし

ものかたりをよくするなりばんじさとか細工たくミ

にてふう婦のゑんハはじめハふゑんする事有しんしやう

はじめよく中比あしくとしよりてしあせよくふつき

はんじやうなるべし子ハ四人の内二人ハさきだつ事あるべし

おいて一人の子ハちからを得べし十七八さいにていのち

あやうきことありいのちハ七十四又ハ八十六にて死すべ

し▲しやかによらいハじゆミやうをまもり給ふ▲ふげ

んぼさつハふくとくをあたへたまふ▲もんじゆは

ちゑをさづけたまふゆへに右のほとけをとりわき

一代のうちしんぐしてよし

【艮／上／連】とら

寅のとしにうまるゝ人ハ一代のまもり本尊こくうざう

ぼさつ也此人前世ハ青帝の御子也

ほくとこのろくそん星より米二石を

金子六貫目をうけて今生へう

まるゝ也ぜんぜにてせつしやうを

このミ鳥けだものを書くころしたるむくひゆへ今世にて災
難おほくしてその身わづらひたゝることあるべししか

れども三十すぎで仕合よくちぎやうざいほうふゑん
ありさいゑんハたび／＼かハるべしふう婦どうねん
ならバナがくたもつべし子ハそだちがたかるべし
ぶつじんをいのりやうしをしてよし三十五六にて
大にさいなんあり五十八九にていのちあやうしいのちは
七十二にておハるべし▲びしやもんハじゆミやうを
まもりたまふ▲大日ハふくとくをあたへたまふ▲ふ
どうハちゑをさづけたまふ一代のあいだよく／＼
しん／＼してよし

【震／下／連】う

卯のとしにうまるゝ人ハ一代の守ほんぞんもんじゆ
ぼさつ也此人ぜんしやうにてせていの御子也北斗の
もんぎよくせいより大豆一石
七斗と金子七貫目をうけえ
てこんじやうへうまる此人ふつき
はんじやうにしてちゑさいかく有

がくもんのこゝろざしふかししかし諸げいをならふ事多くして
とげがたしふう婦むつまじく子三人ありて二人ハちからを
得べし三十五六にてわざハひあり四十八九にてさいハひ
きたるべしいのちハ七十七あるひハ八十六のあきかのえ
かのとの日はつべし▲やくしハじゆミやうをまもり給ひ
▲あみだハふくとくをあたへたまひ▲くわんおんは

ちゑをさづけ給ふ一代のうちよく／＼しん／＼
してさいはひをいのるべし

【巽／下／断】たつ

辰のとしにうまるゝ人ハ一代のまもり本尊ふげんぼさつ
なりこの人ぜんぜにてハこくていの御子なりほくと
のきんていのせいより白米

二石七斗と金子五貫目を

うけて今生へうまる生れ性

ちゑかしこくともほうばい

の中ねんごろなるべししんしやうはんじやうにして
いしよくのゑんあまりありふう婦のゑんハたび／＼
かハるべし子ハ六人ありて内三人ハちからを得べしいのちハ
七十五にて死すべし▲びしやもんハしゆミやうをまもり給ひ
▲やくしハふくとくとあたへ給ひ▲りうじゆぼさつハちゑを
さづけ給ふ一代のうちよく／＼しん／＼ありてよし

【巽／下／断】ミ

巳のとしにうまるゝ人ハ一代の守本尊ふげんぼさつなり
此人ぜんぜにてはくていの御むすめなりほくと
ぶきよくせいより大豆二
石ときんす六貫目とをうけ
えてこんじやうへうまるゝ也

此人ぜんしやうにてによにん

なりし故ぜんぜのごうふかくしてつねにおもひごと

たへずまた人をそしりねたむしやうなるべし子は二人

ありてふたりともちからを得べし二十五六にてふく

きたる三十五六にて火なんを慎むべし四十八九にて

さいなんあるべし五十一にていのちあやうしじゆ

ミやうハ七十四又ハ八十三にて死すべしこれじやう

ごうてんめいなり▲ちざうぼさつハじゆミやうを

まもり給ひ▲こくうざうハふくとくをあたへ給ふ▲

せいしハちゑをさづけたまふよく／＼しんぐ有てよし

【離／下／断】むま

午のとしにうまる、人ハ一代の守本尊せいしほさつなり

此人ぜんぜにてハしやくていの御子なりほくとのはぐん

せいより粟一石二斗金子

七貫目をうけて今世へうま

る、なり此人父母の家に住ば

た、ることあるべしべつにいゑやしき

をもちてよし武家奉公をして大なるてがらをあら

ハしかんじやうなどをとるほどのことあるべしいしよくに

ゑんありといへどもじやくねんのあひだハなにかと

くろうおほかるべしとしよるほどんひらけて

仕合よし妻ゑんハかハるべし子ハ三人ありひとりハ

ちからを得べし二十五六にてあやうきことあり命ハ

六十三またハ七十八にてじやうごうミつべし▲やくし

によらいハじゆミやうをまもり給ひ▲びしやもんでんは

ふくとくをあたへたまひ▲もんじゆぼさつハちゑを

さづけたまふよく／＼しんぐしてよし

【坤／皆／断】ひつじ

未のとしにうまる、人ハ一代の守本尊大日如来なり

此人ぜんぜにて黄帝の御子なりほくとのおきよく

せいよりこめ一石二斗と金子五貫目を受得て

今じやうへうまる、也是人ぜん生

にてももの、いのちを多くとりし

ゆへこんじやうにて子のゑん

うすくたゝる事ありゆへに

もの、いのちをたすけ神ほとけをいのり養子を

してよし二十六七三七八にてたからを得る四十

すぎたゝることあり五十すぎてしあハせよし

いづれも一しやうのうちいしよくにことをかゝず

まんぞくなり六十三にていのちあやうし七十一にて

死すべし▲あミだによらいハじゆミやうをまも

り給ふ▲まりしてんハふくとくをあたへ給ふ

▲くわんおんハちゑをさづけたまふゆへに一代の内

よく／＼しんぐしてこゝろざしたゝしからバとし

よるほどはんじやうなるべし

【坤／皆／断】さる

申のとしにうまるゝ人ハ一代の守本尊大日如来也
此人ぜんぜにて白帝の御子なりほくとのもんぎよく
せいより米十五石と金子五貫目をうけ得て

今生へうまれきたる也此人前
生にて人を多くころしたる

むくいにて目をわづらふこと

ありまたちうぶうのうれひ

あるべしよく／＼ぜんごんをなしていんぐわをはらふべし

うまれじやうこゝろかるくげいのうありて金銀

ざいほうあつまりきたることあるべしつねに

たげんにて事をしそんずることありつゝしむべし

またたびたこくをかけまはりしんらうすることある

べし神ほとけをいのりてよしはるなつの生れ

ハふつきなりあきふゆのうまれハよろしから

ずいのちハ五十六八十三にておはるべし▲くわんおん

ハじゆミやうをまもりたまひ▲せいしハふくとく

をあたへたまひ▲ミやうけんぼさつハちゑをさづけ

たまふ一代のうちよく／＼しんぐ有てよし

【兌／上／断】とり

酉のとしにうまるゝ人ハ一代の守本尊ふどうミやうりう
なり此人ぜんぜハ白帝の御子なりほくとのもんぎよく
せいよりはくまい二石と金子七貫目をうけゑて

こんじやうへうまれたりこゝろざし

たゞしくおやにかう／＼なり

又主君ニちうぎふかし学文をこの

ミぜひをしること人にまさる

しかれども親兄弟にゑんうすくミなし子と成事有

子ハ三人まであるべし一代のうちじやくねんよく中年

あしくとしよりてしあハせよくふつきはんじやう

なるべし四十二三にて大にわざわひあるべしよく／＼

つゝしむべし六十三にていのちあやうしいのちハ七

十七にてはつべし▲びしやもんハじゆミやうをまもり

給ふ▲あみだハふくとくをあたへ給ひ▲こくうぎう

ハちゑをさづけたまふよく／＼しんぐあるべし

【乾／皆／連】いぬ

戌のとしにうまるゝ人ハ一代の守本尊あミだ如来也

此人ぜんしやうハ赤帝の御子なりほくとのもろくそん

せいより米二石と金子八貫目をうけ得て今

じやうへうまれ出たる也こゝろ

すなほにしてほうゆうのまじハリ

よくにんくハあり前年のとき

しんしやうきしづミたびく有

ちうねんすぎてよりざいほうあつまりはんじやう

すべしふう婦のゑんハ初ハふゑんにてのちよき妻に縁

あるべし子ハ三人ありて一人ハちからを得べししそん

のうちてんがになをあらハすものいづる事あるべし

このうまれじやうハ手げいハなりがたしゆへに

あきなひのみちほまなぶかみやづかへをすべし

二十八九にて大にわざハひあるべし六十八九にて

いのちあやうきほどのやまひあるべしいのちハ七十

三四にて夏ひのえむまひのとのミの日おハるべし

▲びしやもんでんハじゆミやうをまもりたまふ▲

くわんおんハふくとくをあたへたまふ▲ふげんぼさつハ

ちゑをさづけたまふ一代のうちよくくしんく

いたさばいよく仕合よかるべし

【乾／皆／連】ゐ

亥のとしにうまるゝ人ハ一代のまもりほんぞん

あミだによらいなり此人ぜんしやうハ黒帝の御子也

ほとこのこもん星よりはくまい一石五斗金子

六貫目をうけてこんじやう

へうまるゝなり此人ぜん

しやうにてこのんでじひ

ぜんごんをなしたるゆへこん

じやうへそのむくひきたりていしよくまんぞく也

また手のげいありて四方よりざいほうあつまり

きたりてゆたかなるべしいつしやうのうちあかき

いふくをきてそくさいゑんめいなるべし子ハ五人

ありて二人ハ大にちからを得べし二十八九さい

にてさいなんあるべし四十五六にてくじざたあるか

大なるうれひあるべしじゆミやうハ七十八九また八十五

にて死すべし扱右に誌す人寿ハ天命の定業なれどあ

やまつてひがうたんめいすくなからずつゝしミて天年を

まつたふすべし▲びしやもんハじゆミやうをまもり給ひ

▲しやかによらいハふくとくをあたへ給ひ▲みろくぼさつ

ハちゑをさづけ給ふ一代の内よくくしんくしてよし

う五 生れ月善惡の事

正月に生まるゝ人ハぜんしやうにてかうはなを

ほとけにくやうし又人のくびくゝり死するをた

すけし故今じやうにて天道よりふくとく

をくだししんしやうをすくひあけ給ふ也かならず

名をあらハす事あるべしはじめの縁ハかハるべし

のちのゑんよしそりやうの子ハそだちがたし

二月にうまるゝ人ハぜん生にて御経一千巻

寺へあげたるくどくありて是身心だてよく人を
あはれミあいきやう有貴人とまじハリ人によ
まはるべし又ぜんしやうにてうしを一疋ころしたる
むくひきたりて父母にはやくしなる、事有べし
又子にもたゝり育がたしぜんごんをなしてよし

三月にうまるゝ人ハぜんしやうにて寺方の茶
碗五十かりてかへさず又茶人のいろりをかりてかへ
さず今生へうまるゝゆへに父母兄弟にはなるべし依而
今世にて寺方へ茶碗をあげらうじんに着類
をあたへいんぐハをはらひてよしさもなくバ身上
よくとも一度ハやぶる也慎べし

四月にうまるゝ人ハぜんしやうにて堂塔の焼る
にうけつけ大藏經七部を出してやかず又らうじんの橋
よりおつるを引あげたすけたるむくひ来りて
今生において天道よりざいほうをあたへ給ふまた
ちぎやうにゑんありねうしのとしにあたらいよく
しあハせよいづれも年よるほどはんじやうすべし
五月にうまるゝ人ハぜんしやうにてほとけのだいざを
きしんしたるくどくによりて今生にていしよくにゑん
あり又手芸有て四方よりきん銀ざいほうあつまり

しあハせよいのちながしぜんしやうにて酒さかなを持
てぢかいの僧をはいさせしむくひあつて父母
さいし兄弟にはなるゝ事あるべし

六月にうまるゝ人ハぜんしやうにて杓の木を十本
うへ奉らんと願をかけてうへず寺の油を九斤かりて
かへさず今生へうまるゝむくひきたりてしんしやうあ
やうくよをわたるべし病身にてたゝることあり
ゆへに杓の木十本うぢ神へあげ油九斤出家へ
ほどこしぜんしやうのいんぐわをはらふてよし

七月にうまるゝ人ハぜんしやうにて主君より施
行に引ぜに車に十輜うけとりて引のこし
わたくししたるむくひきたり思ひよらざるそんする
事ありてしんしやうおもハしからずたびたこくを
かけまハリくらうすべし子にゑんうすくたゝり
さきだつことあるべしゆへにくどくをほどこしてよし

八月にうまるゝ人ハぜんじやうにて身をなげ死す
るものを引あげたすけたるくどくにより今生
にていしよくにゑんあり然共ぜんぜにて出家の銀を
かりてかへさず是むくひきたりて子に縁うすし
又しんしやうやぶるゝ事ありゆへに出家に銀子

をほどこしぜんしやうのいんぐわをまぬかるべし

九月にうまるゝ人ハぜんしやうにてめづらしきくわしと

はなとをほとけにくやうし又首くゝり死する者

をたすけたるゆへこんじやうにていしよくあまり有

たゞしぜんしやうにて寺方の油三斤かりてかへ

さずそのむくひきたり父母兄弟にはなるゝ事

あり又その身も目をわづらふ事有べし

十月にうまるゝ人ハぜんしやうにてせつ生を

好たる故今世にて父母妻子にたゝりはなるゝ

ことあり又としよりあやうき事あり然共

ぜんしやうにて油十斤ぜに五貫文を僧にくやう

したるくどくよりいしよくにゑんあるべし

また手げい有て四方より金銀あつまり仕合よし

十一月にうまるゝ人ハぜんしやうにて酒さかなを

もつて僧をはかいさせしむくひにて今世にてふく

ちうをわづらふべし又そうりやうの子にはなるべし

しかれどもぜんぜにてうし一疋のうにんにあ

たへたるくどく有て中ねんのころより

仕合よく年よりてはんじやうすべし

十二月にうまるゝ人ハぜんぜにてハ出家にて有

しがとなりのハとりをぬすミ又にくじきを好ミ
たる故に子にたゝりそだちがたし又ぶつぜんの

とうめうをふきけしたる故に目をわづらふか手足

やまひ有べしゆへにぢかいの僧をくやうし又是身

出家になりてかいぎやうたもつよしといへり

へ六 うまれ日善惡の事

大陽日 朔日 七日 十三日 十九日 二十五日

大陰日 二日 八日 十四日 二十日 二十六日

天父日 三日 九日 十五日 二十一日 二十七日

天母日 四日 十日 十六日 二十二日 二十八日

天帝日 五日 十一日 十七日 二十三日 二十九日

天皇日 六日 十二日 十八日 二十四日 晦日

大陽日にうまるゝ人ハはんじやうにして

ちぎやうざいほうにゑん有又物のかしらと

なり人を多く引まハしゑせいあり又諸げいハ

あまたならふといへどもしやうじゆする事ハ

まれ也じやくねんのうちに父母にはなれ

みなし子となること有べし

大陰日にうまるゝ人ハ住処たび／＼かハるべし

又やうしむことなること有べしいづれもしん上

ふつきにして諸げい有て人にうやまハる
也じやくねんのあいだハしんらう有べし
中ごろより仕合よくなりとしとる
ほどしあハせよくゑいぐわすべし

天父日にうまるゝ人ハいのちながしわかき間
ハくらうすべし年よるかど金銀ざいほう
あつまりゑいようすべし又つねにじひ心
にしてぜんごんをなせバあくじさい
なんとのがれしそんはんじやうにして
しあハせよとぞ

天母日にうまるゝ人ハしんしやうはんじやう
にしてゑいぐわすべしふつきのいえに生れ
いしよくに縁ありつねにひとをあハれミまた
義理をたつる大氣にして金銀をおします
ゆへにきんぎんたくハへがたしもししハき心あれバ
うれひごとかたび／＼そんする事有べし

天帝日にうまるゝ人ハ男ハよきつまに縁
有女人ハ夫にたゝりはなること有いづれも
うまれじやう氣だてきれゐにしていやしき心
なし又いとなミもいやしきわざをすれば

たゝりわろしなるほどきれいなるしよさ
をしてしんしやうはんじやうすべし

天皇日にうまるゝ人ハ男ハよきつまに縁有
くらゐ高くいせい有性也ゆへにたゝりて
父母にはやくはなるゝ事ありおやのいゑ
やしきに住とたゝり有てあしくべつ
に家やしきをかまへてはんじやう
すべし

上十日	中十日	下十日
朔二十九【ね う／む ま とり】	一二九十【うし ひつ じ／たつ いぬ】	一二九十【とら さる ／ミ ゐ】
三四五【うし ひつじ ／たつ いぬ】	三四五【とら さる／ ミ ゐ】	三四五【ね う／むま とり】
六七八【とら さる／ ミ い】	六七八【ね う／むま とり】	六七八【うし ひつじ ／たつ いぬ】

う七 生れ時よしあしの事【ならびに／ちしご】

子のときにうまるゝ人ハいのちながし然共父母
にはやくはなるゝこと有又兄弟むつまじからず
してしんぞくの力得がたしじぶんにはげミて志

いだすべし諸げいをならふことおほけれども
とかくすへとげがたしうまれつきさ

びしき処にすむ事をこのむしやうなるべし

丑の時にうまるゝ人ハちゑかしこくがく
もんをこのミみちをしる也いしよくとほし
からずとしよるほど金銀ざいほうあ

つまりゑいぐわすべし又ほうこう人ハ文

武りやうどうにたつしめいよをあら

ハし子孫はんじやうすべし

寅のときにうまるゝ人ハじやくねんの頃ハあな
たこなたとはうぐへかけまはりくらうする
こと多しとしよるほど仕合よくなりはん
じやうすべしミやづかへの身ハくはんゐ
ほうろくをましちぎやうざいほう心

のまゝにて諸人にうやまハれるせい有べし

卯のときにうまるゝ人ハ心だていやしからず
生国にハすみがたしたこくにしんしやう有付
べしおして生国せんぞのいゑにすめバたゝ
りて病身となり其上そんしつあるべし
ゆへにたびたこくをうけまはりかせぎて仕合し

金銀ざいほうに心のまゝなるべし

辰のときにうまるゝ人ハ心ひろく大氣也大事
にあへども小事にへんじあくじにあいても吉事
となるべし兄弟ゑんうすくちからを得がたし
つまの縁うすくたびぐかハるべしゆへに
ぜんごんをなしかミほとけをしんじ
てしんしやうはんじやうすべし

巳のときにうまるゝ人ハしやうと心ハラ
ひどくたんき也しかし仕官の身ハてから多
く名をあらハしかんでう加増をうる事
あり又ひとの家とくを得て思ハぬさひ
ハひを得べし故にしんるいの力をからず自
分かせぎてしんしやうをたもつべし

午のときにうまるゝ人ハちゑさいかく有て
諸芸手跡がくもんをすく也しかし父母兄弟
さいしのゑんうすくたゝりはなるゝ事有
又つねに家にあてハ人のしることまれにして
しあハせわろしゆへに他所へ出てかせがバはつ
たつしゆつせずべし

未のときにうまるゝ人しんしやううきしづミ
たびくあり若き時ハしんらうする事多く
年よるほどよし高貴の人にちかづきゑいぐわ
をすべし又いなかおんごくをかけまハリ
かせぎて金銀ざいほう心のまゝにして其
身そくさいにて仕合よかるべし

申のときにうまるゝ人ハさいゑんかハリて
のち男子ハくらゐたかきつまのゑん有
女人ハちへさいかくありてふつきの夫に
ゑん有ともにさかふべしじやくねんの
あいだハかなたこなたとかけまハリて心
労おほくとしよるほど仕合よし

酉のときにうまるゝ人ハしよくあまり
あり又ぶんぶりやうだうにたかししゆくんに
しゆつどうしてちぎやうざいほうにゑん有しよ
にんう●ひもちゆべしたゞしつねに家にゐてハ
よろしからず●勤してほういうとまじハリて
よし中年のころ父母にはなるべし

戌のときにうまるゝ人ハしんしやうはんじやうに
してけんぞく多し尤くらゐいせい有て諸人あがめ

うやまふべし又しゆくんとわがうしてちぎやう
かぞうを得べししかれどもじやくねんのあいだ
●方へかけ廻りくらう多し又うまれ
じ●うじひふかく年よるほど仕合よし

亥のときにうまるゝ人ハくらゐ高くして下人多
し諸人のあがめうやまふべし人のしゆくん
となるうまれじやうなり又ちゑさいかくありて
手ならひがくもんをすきてじぶんにたつする方
ありうまれ持てこゝろゆたかにしてしよげいに
たつしじやうじゆせずといふことなし

う八 生産性吉凶十二運善惡例

養	胎	絶	墓	死	病	衰	帝	臨	宦	沐	長	金性
三 たつ	二 う	正 とら	十二 うし	十一 ね	十 ゐ	九 いぬ	八 とり	七 さる	六 ひつじ	五 むま	四 ミ	
九 いぬ	八 とり	七 さる	六 ひつじ	五 むま	四 ミ	三 たつ	二 う	正 とり	十二 うし	十一 ね	十 ゐ	木性
六 ひつじ	五 むま	四 ミ	三 たつ	二 う	正 とら	十二 うし	十一 ね	十 ゐ	九 いぬ	八 とり	七 さる	水性
十二 うし	十一 ね	十 ゐ	九 いぬ	八 とり	七 さる	六 ひつじ	五 むま	四 ミ	三 たつ	二 う	正 とら	火性
六 ひつじ	五 むま	四 ミ	三 たつ	二 う	正 とら	十二 うし	十一 ね	十 ゐ	九 いぬ	八 とり	七 さる	土性

長

此うんにあたる人ハ長生して夫婦中よし家業
大にさかへてよろづよし子孫無病に長生すべし
東西かけ廻りはたらきてよしおこたらバまづしかるべし
○此うんにあたれば兄弟ともによし其内他所別々に
なりて家をなすべし兄弟おなじいとなミハよろしからず家業
をわかつて世わたりをすればはんじやうすべし

沐

此うんにあたる人ハふうふの縁うすし二度めのゑんは
男女ともによるべしさすればとみさかへはん
じやうすべし子孫そくさいなり兄弟中ハ睦しからずと知るべし
○此うんにあたれば武家ならバイよく兄弟ころうの心
をいだきたがひにあらそふ意ありて自分家をたてゝ

心さかふべし此運の人芸術ひいづるか人の頭となるべし
冠

此うんの人ハ夫婦の中天理にかなひよろづ長久也
ふうふともにくらゐ高し方々より縁を求める人
多かるべし然共親類重縁にあらざればよろしからざる也
○此うんの人ハ兄弟国をへだて海川をへだて、住居
すれバわざハひなしさなければかならずさいなん
あるべしもつとも火災の恐等有つ、しミてよし

臨

此うんハ夫婦の中大によししかれともたがひに隔る
心あるべし物をつ、しミわざハひのおこらん事を
おもひへだつる心あれバ夫婦ともに大によかるべし
○此うんハ兄弟うんつよしともに同居して德行をおさ
むる事大によし兄弟ハかまどをわかつてすむものな
れども此うんハ同居してさいはひを得るうんなり

帝

此うんハふうふともに半吉なり入むこなだに行て
よし然どもや、もすれば悪事きたりて害あるべし
其心たゞしければものごと心のまゝに仕合よかるべし
○此うんの兄弟ハ運つよし初ハむつまじからず十三才
より十六七迄病あり養子にゆきてひとの家とくを

つげバ殊の外よろしきうんなりとぞ

衰

此うんハ夫婦の縁とりもつ人すくなし其上初の
ゑんハ死別にてもたず二度三度もかハりて
おさまるべしとかく妻縁うすく病身ならずハ氣に入まじ
○兄弟ハ中よくともとかく仕合よろしからずしか
れども宿縁にめぐらばきやうだいともにさいはひ
あるべしつ、しミて善事をおこなふべし

病

此うんハ夫婦の縁うすし朝暮発心のねんおこりて
そひなれたる妻をきらひ又妻にもうとまる、
ゆへおのづから無●氣おこる也互にむつまじくすれば大吉也
○男女ともに兄弟むつまじからず兄ハ弟をあだがたきの様に
思ひ兄弟わがうすることなしもと兄の志正しからぬ
ゆへ已下の兄弟ミなむつまじからず慎むべし

死

此うんハ夫婦じやくゑんしがたきしやう也時ならず
つまをうしなふべし然どもよく保養をつくし
善事をなさば無事にして老てのち仕合よかるべし
○兄弟中あしく心たけ／＼しくたがひにわがうしがたし

しかし武家にしてハ武げい成就すその余の家職にてもとかく力りやうはやわざなどにたつするしやうなり

墓

此うんにあたる人ハ仲媒なしに夫婦のけいやくをするしやうなりしかるゆへにはじめハ中よけれどものちにハむつまじからずふかく慎ミてよし
○兄弟の運ハよし家督自然とそなハリてあるうまれじやうなりしかし氣転のきかぬせいしつにてまハリ遠きふんべつあるべし氣をしつかり持べし

絶

此うんハ夫婦の中大にわろしくせつ多くし
てすへに大になんあるうまれじやうなりつゝし
ミテ諸事善をなせバ凶をへんじて吉にむかふべし
○此うんハ兄弟かならず死してわかるべしもし死べつなくんバ方々へわかれちりて有べしそのうへ中あしくたがひにちからを得がたし

胎

此うんハふう婦中よししかし中をへだて、
居る事有べし身に善事ありて人に憎まれず然ども
おもハぬさいなんをうくること有べし信心すべし

○此うんの人ハ兄弟遠ざかりへだてすむべしたがひにたすけ合力をとならバ仕合よかるべしよく／＼慎ミ善行をなすべししからバ思ハぬさいはひ有べし

養

此うんの人ハ夫婦同年ならバナなくさかふべし初にハさハリあれどものにハよかるべしふう婦ともによくたもち身をつゝしミてよし
○此うんハ名聞ふかきしやう故兄弟の中も実儀なし
他人ハ用ひらるゝ性なるべししかし外ハうつくしきやうに見え実すくなきうまれじやうなり

う九 生れ年の生れ月によりて財宝家督の有無を知事

たとへば甲のとし正月のうまれハ向禄乙の年
十一月のうまれハ逐禄なり余ハなぞらへしるべし

旺禄	病禄	逐禄	耗禄	天禄	煞禄	才禄	暗禄	正禄	背禄	因禄	向禄	
十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	正	甲
正	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	乙
二	正	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	丙
三	二	正	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	丁
四	三	二	正	十二	十一	十	九	八	七	六	五	戊
五	四	三	二	正	十二	十一	十	九	八	七	六	巳
六	五	四	三	二	正	十二	十一	十	九	八	七	庚
七	六	五	四	三	二	正	十二	十一	十	九	八	辛
八	七	六	五	四	三	二	正	十二	十一	十	九	壬
九	八	七	六	五	四	三	二	正	十二	正	十	癸

向禄

きやうろくの中のむまれハ
ふつきにはなハだゑいぐハ
なりおのづから徳高く人
に敬せられ禄を増し山林

にとみ衣食たりてざいほうみちふそくなし志し
たゞしく風雅のミちをこのミてその心寛大にして
仁慈ありたとひ凶事にあふことありとも却
吉事と化す官ますくすゝミて利を得るなり

困 碌

こんろくの中のうまれは
六親したしミうすく衣食
ゑんにしたがりてわたるは
うまれじやう剛強にして三度
零落なり中年にしてやふること有外へ出て
人のなさをうくる事すくなし老にいたりて人の
にくミを得る事あるべしよくつゝしミてすへの
年にいたらバおほくさいハひを得べし

背 碌

はいろくにうまるゝ人ハ他
国にゆきてきようだいをのゝ別
てたがひにたすくる事なし
生れし家をつとめず所を
かえてかせぎてよしとかく物ごとにつきてくらう多
きうまれじやうなりあるひハ西にゆき東にうつりて
いたづらに辛勞する事にいそがしきしやうなり
しかれどもとしおひてかぎやうさだまりゆたかなり

正 碌

せいろくのうまれハ人のしる
ことまれなりつとめてよく

つゝまやかにして家事を

たつる也先祖よりの家業を

つぎがたかるべしミづからあらためかへて利を得る也
妻にあなどらるゝうまれじやうなり時にあたりて
身をゑようにくらすべしはじめハ家業さだまりが
たく老てのち家計さだまるべし

暗 碌

あんのくのうまれの人ハ
衣食すくなし兄弟はなれ
居てちからを得ることかたし
人にやはらぎまじはりて
貴人にちかづかバ命長うしておだやかなるべし妻子
につきてハわざハひ多かるべしせんぞのぎやうハつぎ
がたしへいぜいことしげくしてにしひがしへかけ
まはりて心せハしくしんらう多かるべし

才 碌

さいろくの生まれの人ハ
衣食たりてはなハだふう
きなり田畠多く牛馬
たりて四方へわかし奴僕
多くしてそれゝの行ひを得たり産業もつとも

よろしくまことに素討なるべし。し中年
かたちをかゆること有といへどもしばらくのうちに
もとのごとく万事心のまゝにはんじやうすべし

煞祿

さつろくにうまるゝ人ハ衣
食ともしからず風りうに
して弁説よく物ことに巧
にしておもしろき産業を
なしこれをつればかれをなしひろく人と
まじハリ一所にとゞまらず物にかたよらずたゞし
わかきときハつねに不足多しおひてのちうん
つよくなりてしあハせよし

天祿

てんろくのうまれの人ハ
官位ある人か又ハ富貴の
人なるべし財宝をよく
たもち奴婢多し一しやう
衣食ミち足れり子二人ありおのゝ聰明にして
孝行なるべし夫婦の中はなハだやはらぎむつまし
くしかも礼義をみたる事なく百事そなハらずと
いふ事なくいのちながくはんじやうすべし

耗祿

がうろくのうまれの人ハ
こゝろ軽くしあんくどから
ず貴人にちかづきてした
しミをうけつねに酒食
にあきみちて万事心のまゝなるべししかれども
先祖よりの家業をことゝくあらためてミづから
別にすぎハひをたてゝじやうじゆすべし又ふかく
仁ありて人をあハれミ又人にも愛せらるべし

逐祿

ちくろくのうまれの人ハ
計たくらぶる事を多く
してミづから高きを願
ひてこゝろのうちつねに
たらざることおほし百事遠大をたくミ手に天月を
つかまんことを欲す親子兄弟すべて一族和せずして
ちからを得る事まれなるべしよくつゝしミて
老後のさいはひをまつべし

病祿

ひやうろくのうまれの人ハ

先祖のいへを相続する事

なくして外へ出て別に産

業をつとむべし道を修して

ならずこゝろつねにさだまらず寿命ハながししかれ共

ふしあハせにして心くるしむこと多しうまれ

つきぶしやうにして米穀すくなく年老てたすけ

なし但し身しんらうなる事をつとめて福あり

旺祿

わうろくのうまれの人ハ

財宝多く産業をのづから

きたる又人にまじハる事を

このんでよく朋友を愛す

天性にうわにしてしづかなる事をすくなりとし

若き時人の讒にあふことありてわざハひ来らんと

すれどもこれを辞するこゝろなし然とも天の

たすけありてまぬかれ益富さかへて寿ながし

う十 乳母抱る吉日

とら う さる

とり 此日よし

う十一 閏月

閏月ハ周転の数三百六十五日余日の巡る事ハ二百六十日

月ハ日より少なく三百五十日余なり是によりて一年に十日

余を余して三十三月に至て閏とす尤閏月ハ別に節

なし閏を早く知んと思ハゞ暦の冬至の日を見て夫より

後の日数程其月よりかぞへ見るべし是則閏月なり

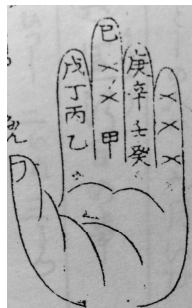
う十二 生年の干支早繰の法

此くりやうハたとへバ戊子の年

に三十五才になる人何の干支何

の年ぞと問に即甲寅のとし

也左に出すごとし



十干を知事何十二ても十の

分をすてゝはしたばかりを

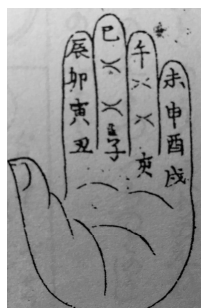
用ゆる也たとへバつちのえを一とし

逆に一ツづゝかそへ得バ五つめは

則甲にあたるこれ戊のとし

三十五才になる人の十干なりと

しるべし余ハ是に倣へ



十二支を知事たとへバ子を一として順に丑寅とかぞへこの

二ツをのけて卯を十とし

又辰一ツこえて己を二十とし午

ひとつこへて未を三十とし其当

たる所の一ツ前より逆にはした

ばかりかぞへもどれバ子年三十六才

の人ハすなハち寅としるなり

う十三 産衣着初るに忌べき大事

甲乙の日の産ハ 【かのえかのとの／日わろし】

【ひつじさるの

／ときわろし】

丙丁の日の産ハ 【きのえきのとの／日わろし】

【いぬのとき／

わろし】

戌巳の日の産ハ 【ミづのえミづのと／の日わろし】

【うしひつ

じたつ／いぬのときわろし】

庚辛の日の産ハ 【ひのえひのとの／日わろし】

【ミむまのとき

／わろし】

壬癸の日の産ハ 【つちのえつちのとの／日わろし】

【うしひつ

じたつ／いぬの時わろし】

右の日時ハ産着初さるに忌べし大方ハ辰巳の日

よし男児ハ申の時よし女児ハ酉の時よし

う十四 失物うらなひの事

子の日 にしの方の女とりて山の中におくなり

丑の日 にしの方の男とりていぬの方におくなり

寅の日 いぬの方の女とりてねのあひだにおく也

卯の日 たつの方の男とりていぬのかたにおく也

辰の日 むまの方のをんなとりてとりの家の家におく

巳の日 ねのかたのをんなとりてとりの方またハ

ねのかたにおくなり

午の日 ゐの方のどうじとりきたの方はやしのなかにおく也

未の日 うしの方の人とりてひがしのかたのいハやの中におく

申の日 ひがしのほうのをんなとりてきたの方またハ

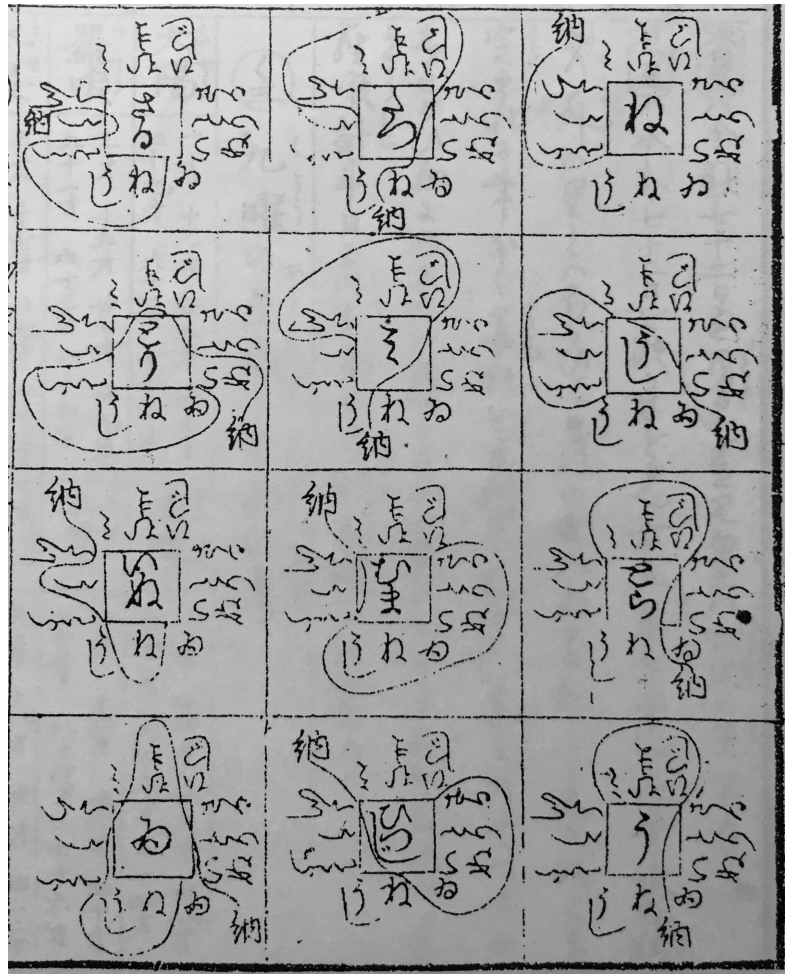
さるとりのほうにおくなり

酉の日 にしの方のおとことり人の手へわたるなり

戌の日 とりの方のほうしとりいぬのあひだにおく也

亥の日 さるの方のしもべとりミのかたにおくなり

う十五 生年により灸せざるとし
 子のとしの人ハ 二月いむ
 丑のとしの人ハ 二月いむ
 寅のとしの人ハ 九月いむ
 卯のとしの人ハ 四月いむ



辰のとしの人ハ 十月いむ
 巳のとしの人ハ 四月いむ
 午のとしの人ハ 十一月いむ
 未のとしの人ハ 十月いむ
 申のとしの人ハ 十一月いむ

酉のとしの人ハ 三月いむ
戌のとしの人ハ 五月いむ
亥のとしの人ハ 九月いむ

う十六 運行日の事

正 ひつじ 二 いぬ 三 たつ
四 とら 五 むま 六 ミ
七 とり 八 さる 九 ゐ
十 ね 十一 うし 十二 う
右の日かたく灸治すべからず

う十七 生月男女によりて善悪ある事

正 【男よし／女わろし】 二 【男よし／女わろし】 三 【男
よし／女●也】
四 【男よし／女わろし】
五 【男命長し／女●なり】 六 【男よし／女わろし】 七 【男
●也／女よし】 八 【男よし／女わろし】
九 【男よし／女わろし】 十 【男よし／女わろし】 十一 【男
よし／女わろし】 十二 【男●あり／女よし】

註

伊藤孝行（二〇一八）翻刻『万代大雑書古今大成』（八）、「メディア・コミュニ
ケーション研究」七一、一二二頁

謝辞

本翻刻をなすにあたり、篠田健一氏に数多御教示いただいた。こ
こに記して感謝申しあげる。